

年譜

明治五年二月十七日―長野縣筑摩郡神坂村に父正樹の四男として生る。

明治十四年―(十歳) 東京に遊學。

明治二十年―(十六歳) 明治學院入學。

明治二十二年―(十八歳) 高輪臺町教會で牧師木村熊次より基督教の洗禮を受く。

明治二十四年―(二十歳) 明治學院卒業。

明治二十六年―(二十二歳) 北村透谷を知る

雜誌「文學界」創刊す。

明治二十九年―(二十五歳) 北村透谷一週年

を迎へ、「透谷集」を編む。上田敏・田山花袋・柳田國男等を知る。東北學院教師として仙臺へ赴任。

明治三十七年―(三十三歳) 日露戦争。

「破戒」の稿を起す。三女縫子誕生。

明治三十八年―(三十四歳) 上京、西大久保に居を定む。長女、次女、三女、死す。長男楠雄生る。「破戒」脱稿す。

明治三十九年―(三十五歳) 「綠蔭叢書」第一篇として「破戒」を出版す。ついで最初の短篇集「綠葉集」を編む。短篇「家畜」「朝飯」をかき、淺草新片町に移る。

明治四十年―(三十六歳) 短篇「並木」をかき、また長篇「春」の準備に着手す。龍土會に参加、國木田獨歩を知る。

明治四十一年―(三十七歳) 「春」を東京朝日新聞に連載し、ついで「綠蔭叢書」第二篇として出版す。次男雞二生る。

明治四十二年―(三十八歳) 第二短篇集「藤

明治三十年―(二十六歳) 「若菜集」を出す。十二月「文學界」廢刊。

明治三十一年―(二十七歳) 「一葉舟」を出す。次いで詩集「夏草」をかく。齋藤綠雨、高安月郊、蒲原有明等を知る。

明治三十二年―(二十八歳) 小諸義塾の教師として信州小諸へ赴任。函館の秦冬子と結婚す。

明治三十三年―(二十九歳) 「落梅集」を出す。

明治三十四年―(三十歳) 長女綠生る。

明治三十六年―(三十二歳) 沈黙三年、「千曲川のスケッチ」をかく。次女孝子誕生。

村集」と感想集「新片町より」を出版。三男翁助生る。

明治四十三年―(三十九歳) 「家」上巻着手。

明治四十四年―(四十歳) 「家」脱稿、「綠蔭叢書」第三篇として上梓す。四女柳子誕生、妻冬子死去。

大正元年―(四十一歳) 「千曲川のスケッチ」を發表、第三短篇集「食後」を出す。父正樹の遺稿歌集「松が枝」を編む。

大正二年―(四十二歳) 第四短篇集「微風」と感想集「後の新片町より」を残して佛蘭西の旅にのぼる。東京朝日に佛蘭西だよりを送りはじむ。

大正三年―(四十三歳) 巴里の客舎で「櫻の實の熟する時」に着手。最初の佛蘭西だより「平和の巴里」を出版す。歐洲大戦勃發、巴里



の動亂を避けて一時佛國中部オート・ギエンヌ州、リモオジユの田舎町に住む。

大正四年—(四十四歳) 第二の佛蘭西だより「戦争と巴里」をまとめる。戦前戦時の旅の間に、石原純、河田嗣郎、小泉信三、澤木四方吉水上龍太郎、郡虎彦、山本鼎等を知る。

大正四年—(四十五歳) 巴里を辭し、ロンドンより熱田丸にて喜望峰を迂回、五十五日の海上生活を送つて歸國す。

大正六年—(四十六歳) 航海記「海へ」をかき、「櫻の實の熟する時」を完成、ついで童話集「幼きものに」を出版す。

大正七年—(四十七歳) 「新生」第一部に着手す。麻布飯倉片町に移る。

大正八年—(四十八歳) 「新生」第二部脱稿。大正九年—(四十九歳) 「佛蘭西紀行」別名

大正十五年—(五十五歳) 「嵐」を草す。

昭和二年—(五十六歳) 「分配」をかきついで「山陰土産」を大阪朝日に寄す。「夜明け前」の準備に着手。

昭和三年—(五十七歳) 「夜明け前」の準備を繼ぐ。北京大學徐祖生の手により支那譯「新生」成る。加藤静子と結婚す。

昭和四年—(五十八歳) 「夜明け前」第一部起稿。感想集「市井にありて」を一巻にまとむ。昭和六年—(六十歳) 「夜明け前」第一部脱稿。フェルドマン夫人により「破戒」の露譯成る。

昭和七年—(六十一歳) 「夜明け前」第二部に着手。

昭和十年—(六十四歳) 「夜明け前」第二部脱稿。

「エトランゼエ」起稿。

大正十年—(五十歳) 「佛蘭西紀行」の稿を繼ぎ、「ある女の生涯」其他の短篇を草す。「透谷全集」の編直しを果して遺族に贈る。

大正十一年—(五十一歳) 「佛蘭西紀行」を完成す。感想集「飯倉だより」を編む。「藤村全集」十一巻を出す。

大正十二年—(五十二歳) 童話集「をさなものがたり」をかき。

大正十三年—(五十三歳) 短篇「三人」「伸び支度」等。震災後の讀者のためにもと思ひ立ち、小冊子「藤村パンフレット」第一輯、第二輯を出す。

大正十四年—(五十四歳) 感想集「春を待ちつゝ」一巻に纏む。この年の後半「藤村讀本」六巻を編纂す。

昭和十一年—(六十五歳) 感想集「桃の雫」を飯倉生活の名残として、この夏萬國ペン大會出席のため南米の旅にのぼる。南米各地、北米ついで曾遊の地巴里を廻り、マルセユより歸東、紅海海上にて越年す。

昭和十二年—(六十六歳) 麴町六番町の新居に移る。「巡禮」起稿。十月より重病。

昭和十三年—(六十七歳) 四月より快方に向ひ、新秋とともに健康回復するも十分ならず。定本版「藤村文庫」の編纂に病後精養の日を送る。

昭和十四年—(六十八歳) 定本版「藤村文庫」十巻完結す。「巡禮」續稿中。



## 附記

島崎藤村の作品全體を通して、一つの顯著な意向を見出すことが出來よう。それは「旅」あるひは「旅人」といふ理念の深められて行く相である。明治三十年「若菜集」を出してから、最近の「巡禮」に到るまで、約四十年の間、藤村は終始一貫自らを旅人とよび旅人のあらゆる心を描いてきた作家である。

「旅人とわが名よばれん……」——この芭蕉の心は藤村の生涯に深く根をおろしてゐる。あの老大な作品は、云はば旅人の一大體系なのだ。私がこの小冊子でかかうとしたことも、作品を通してみた藤村の旅姿に他ならない。一漂泊者の肖像と傍題したのはそのためである。文學上の流派や主義や解説といったものを、この本から求めようとする讀者は多分失望するだらう。

はじめの計畫では、第五章を「春待つ宿」として藤村の短篇を語り、第六章に「夜明け前」をおき、第七章を「老いたる旅人」として「巡禮」などについてかくつもりだった。しかしこの小冊子の種々な制限から許されなかつたし、「巡禮」もまだ完成してゐない。藤村に訪れた老年の美しさ、みづみづしさ等については是非述べたく思つてゐるが、他日に期したい。

この本に引用した藤村の文章は、殆んど定本版藤村文庫からのものである。文庫に収録されてゐない作品は、以前の單行本や全集によつた。藤村文庫は、藤村自身の手によつて昨年編纂されたもので、定本版にふさはしく周到であり、多くの回想や附記がついてゐるから参考になることも多かつた。しかし疑問とする點もあるので、そのことは本文中隨時にかきつけておいた。



年譜は同じく定本版の「静の草屋」巻末に詳細なのが載つてゐる。それをそつくりここへ轉載するには長すぎるので、私が必要と思はれる個所だけを抜萃編纂し直した。本書の意圖からすれば、年譜は必ずしも必要ないのであるが、書肆の希望もあり、またこの本を機縁として藤村を讀まうとする讀者にとつて何かの便宜にもなるであらうと思ひ、巻末に附しておいた。

昭和十四年秋

著者

昭和十四年十一月十五日印刷  
昭和十四年十一月三十日發行

正價 金五拾錢

著者 龜かめ井い勝かつ一いち郎らう  
東京府吉祥寺御殿山

發行者 八坂淺太郎  
東京神田駿河臺  
京都田中西浦町

印刷者 堀内文治郎  
東京神田三崎町二ノ三

發行所

東京神田駿河臺  
振替東京五三九〇九番  
京都田中西浦町  
振替京都一三二五番

弘文堂書房

(落丁・破損等有之候節は早速御取換可申上候)

堀内印刷所印刷



最新刊

希臘神話

原隨圓著

町人

坂田吉雄著

ハムレット

中西信太郎著

フランス古典悲劇

田中敬次郎著

ビターマイヤ文化

吹田順助著

近刊

支那古代文化

小島祐馬著

日本美術

植田壽藏著

能記

金剛巖著

島崎藤村

龜井勝一郎著

バルト神學

菅園吉著

ナチス演劇

新關良三著

ヴィクトル・ユーゴー

吉野松子著

ロシア文學の二潮流

馬場哲哉著

朝鮮史

三品彰英著

日本庭園

岡崎文彬著

モリエール

林憲一郎著

既刊

人間のボリス的形成

山内得立著

日本精神と世界精神

柳田謙十郎著

歴史哲學と政治哲學

高坂正顯著

續刊の一部

文化類型學

高山岩男著

現代英文學の課題

肥後和男著

敘情詩論

深瀬基寛著

フランス近代作家

竹友藻風著

大數學者(上)

太宰施門著

實驗發生學(上)

小堀憲著

社會存在論

市川衛著

支那思想とフランス

務臺理作著

英雄の性格

小林太市郎著

性の現象

朝山新一著

南洋文學

宮武正道著

最近の物質觀

田村松平著

日本生物學の歴史

湯川秀樹著

アメリカ文藝思潮

上野益三著

動物の感覺生活

志賀勝著

國民と教育

木村素衛著

カントと形而上學

谷山隆夫著

原始社會

岡田謙著

言語の構造

泉井久之助著

自然哲學

下村寅太郎著

日本文化の話

長與善郎著

ドイツ戰爭文學

石中象治著

近世日本化學思想史

富成喜馬平著

水戸學

櫻村壽一著

動物學

簡井嘉隆著

日本彫刻史

源豐宗著

現代フランス小説

長瀨信壽著

ホメロス

伊吹武彦著

西鶴

源退藏著

ハルネ

伊原重信著

佐藤春夫

保田與重郎著

創作方法論

舟木重信著

話される言葉

保田與重郎著

レニブル

豐島與志雄著

十六世紀諷刺文學

岸田國士著

近松

武者小路實篤著

和歌

中島健藏著

ハイデッカー

渡邊一夫著

心理學の實驗

藤井乙男著

病態心理學

瀧久孝著

階級學

高木貞二著

二十世紀の探險史

三宅剛一著

印度古代文化史

小谷庄四郎著

根本佛敎思想の發展

白井二尚著

大乗起信論

小牧實篤著

英國と英國國民

本田義英著

久松義一著

石田憲次著



5/2 M13











